

芭蕉の風雅

つちだりうたらう
土田龍太郎

かの芭蕉庵桃青、俗務の方にはたえてうとかりきてふまでのことこそなけれ、世に経る日々ただ俳諧の一すぢにのみつながれて倦まず、この道の奥を究めむための志のひたぶるなりしことさらにも言はず。今に遺れる發句一千にもあまれど、これかれの句、品と位とおのおの異りてひとしからず、風躰またさまざまにて世とともに移り變れるあとあり。さるはいとやすく口遊める句あり、腸をしぼるばかりの苦吟あり、遣り句に言ひ捨て句、はた仕損じ句さへなきにしもあらずなれば、これらさながらひとしく秀句名吟と言ひてやみなましかばなかなかなほざりならまし。さはれおぼろけの作者のまねぶともえまねぶべくもあらぬめでたき句、古へ今にならびなき句げに數多なること疑ひなければ、うべこの翁を俳聖と呼びて仰ぎ尊ばむにいささかのはばかりありとしも思はれず。

桃青翁みづからの書のおもてに、おのがたどれりし風雅の道を理立ててつづさに説けりしことのかつてなきはなげかしきにえたへぬはさることなれども、そはこの翁の究めしさかひいとも玄妙にしてとてもかくても言詮の及ぶかぎりにあらずとりとめむかただになきがゆるにてもやあるべき。

されば蕉風俳諧の道すぢをいささかにも明めむとほりせば、かの翁のをりをりの句評と書牘、また門人の綴れりし草子などうち見て、翁の口よりたまさかに出でし言の葉ばかりをとり集めて、ねもころにけみせむほかによき手だてありとも思はれず。かかるくはだて、ただ管中より全豹を窺はむにひとしければ、こころもとなきことたとしへなし。

(令和元年十月二十八日受附)

